２０１４年度自由研究期間　研究成果概要

所属・職・氏名：　社会学部・教授・李　建志
研究課題：李王垠の研究
研究期間：２０１４年４月１日～２０１４年９月３０日

研究成果概要（日本文（全角）の場合は2,000字程度）

朝鮮の王公族の研究は、日本の朝鮮史研究の若き気鋭・新城道彦氏によってずいぶんと明らかになってきた。この「王公族」とは誰のことか、新城氏に語ってもらおう。

> （大韓帝国の―引用者）純宗皇帝を天皇の属臣のように扱えば、大規模な暴動を招きかねないことは容易に推測された。それゆえ、併合準備委員会では「対韓細目要綱基礎案」を踏まえて、純宗皇帝を華族ではなく、世襲の大公とし、高宗（純宗の父で大韓帝国の先代皇帝―引用者）は一代限りの大公とするとした。また、彼らの生活に急激な変化を加えないという寺内（正毅―引用者）統監の方針にもとづいて、大公家の歳費は大韓帝国の皇室費と同額の一五〇万円と定めた。この処遇案は一九一〇年七月八日に閣議決定されている。（『朝鮮の王公族』、中公新書、二〇一五年、三九頁）

李完用を首班とする大韓帝国政府は、「大公」ではなく、「王」という尊称を求めるが、将来的に「朝鮮王」を名乗る危険性があったため、「寺内は、大韓帝国皇室の姓である『李』をつけて『李王』を提案」（同書、四四頁）し、傍系のふたつの「公家」とともに、世襲とした。

具体的には、本論で詳しく見ていくが、高宗[*i]は「徳寿宮李太王」、純宗[*ii]は「昌徳宮李王」と呼びならわし、皇太子だった李垠は「王世子」として冊立され、これを「王族」とし、傍系のふたつの公家（公族）ともども「皇族の礼」の待遇を受けた。その「班位」すなわち「天皇を頂点とした皇族の序列」は、韓国皇帝（昌徳宮李王）と太皇帝（徳寿宮李太王）が「皇太子嘉仁と皇太子妃の次に、皇太子李垠と義親王李堈（および李熹公―引用者）は宣下親王の次」（新城、二〇一一年、五八頁）とされ、あくまでも皇族とは区別されながら、「殿下」の敬称が許された（ただし、王族とは違い、公族の子に関しては「殿下」ではなく、男子には「様」、女子には「姫」としたという。新城、同書、五二頁）。
「韓国併合」という大きな事業の前に、王家およびふたつの公家は、王族、公族として冊立され、皇族に準ずる「準皇族」といえる存在となったわけだ。ちなみに、先に見た「昌徳宮李王」という呼称は、純宗が死んだあとに李垠が「李王」の尊称を継承したあとも使われている。これは「皇族の宮号（梨本宮、伏見宮など）に似た意味合いを持たせるため、東京在住であっても代々継承させることにしたと考えられる」（同書、一九二―一九三頁）。新城氏が語る、朝鮮の王公族が「準皇族」として扱われたということも、かなりの説得力がある。
だとすれば、これまでの議論を総合すると、次のようにもいえるだろう。明治以降の大日本帝国では、天皇が主権者であり統治者として君臨していた。天皇とその妃である皇后は、とく

に「陛下」と呼ばれる。そして昭和期には皇太子の他、直宮家が三家存在していた。かりにこの天皇の一家を天皇家と呼び、それを皇族の中核に置くとすれば、そこからは少し離れた位置には他の皇族すなわち伏見宮家以下一一家の「宮様」が存在しており、文字通り天皇を守る藩屏となっていた。そして明治末年から日本国に「編入」された朝鮮の王族、公族は、「準皇族」として天皇を中心とした皇族の一員として、「殿下」の呼称を許された「宮様」として存在していたのである。もちろん、この皇族の同心円の向こうには、公候伯子男の爵位を持つ華族―明治維新の元勲の伊藤家や徳川宗家、その他の旧大名や旧公家、さらには臣籍降下した元皇族がそれぞれの爵位を持って華族に列せられ、そのさらに向こうには新華族といわれる新参の華族が同心円的に展開している―、そして華族に準ずる位置づけとされた「朝鮮貴族」が藩屏として周囲を囲んでいた。平民―その中心は「内地」平民だが―は、「内地」であれば華族のさらなる藩屏として存在していた。そのさらに向こうには、「外地」（台湾、朝鮮など）の「平民」[*iii]、「支那」人など東洋系外国人、さらにその向こう側に、旧被差別部落出身者のような「新平民」や朝鮮の被差別階級である「白丁」、日本の非定住民たる「サンカ」、そして「台湾生藩」や「北海道旧土人」という差別的な呼称をあてがわれていた先住民がより周縁へと、同心円状に配置されていたといってもいいだろう。忘れてならないのは、華族でも平民でも、またそれ以外の民でも、男性が優位であり女性はより周縁に位置づけられていたことも想起する必要があろう。このように、敗戦前の大日本帝国は、植民地を持っているがゆえに必然的に「意識的多民族国家」として成立しており、その体制は「日本的カースト」とでもいうべき細かい上下関係を維持した“血”の帝国主義だったといってもいいかもしれない。

もちろん、沖縄、朝鮮などでは、現地の「華族（貴族）」の藩屏として現地の「平民」がおり、台湾では「内地」平民の支配下に現地「平民」、そしてそのさらに向こうに「生藩」が支配される形になっている。同じことは北海道でもいえ、支配者である内地「平民」の支配下に「旧土人」すなわちアイヌがいたが、そのアイヌも「コタンコロクル（伝統首長の血筋）」とそれ以外という階梯があったわけだ。すなわち単純な同心円では描ききれない複雑さがあるものの、表面上はきわめて「きれいな」同心円となっているところに、この大日本帝国的カーストの支配構造の巧妙さとなってあらわれている。この問題を考えるべく、李王垠という人物に光を当て、その評伝的研究を行うことで、大日本帝国の構造と、日本と朝鮮の問題、ひいては朝鮮にとって国家元首とは何なのかを考えることを目標に、原稿を執筆中である。

---

*i　李氏朝鮮王朝二六代王にして、一八九七年に成立した大韓帝国初代皇帝。李垠の父。

*ii　大韓帝国二代皇帝。李垠の兄。

*iii　朝鮮では「平民」のことを「常民」という。ちなみに、朝鮮の貴族階級は、本来は「両班」といわれる人びとなのだが、この両班がそのまま朝鮮貴族になったわけではなく、韓国併合での功労者を中心として朝鮮貴族がえらばれていることから、「模範的な外地人」として彼らが認定されていることがわかる。ゆえに常民は、この模範的な「外地」人である朝鮮貴族の藩屏のより（天皇家から）遠い位置に存在していたといえよう。